

(資料紹介)

早稲田大学
図書館所蔵

吉井勇主宰詩歌文芸雑誌『相聞』・『スバル』の

自筆原稿コレクション

松尾 亜子

はじめに

一九九〇年(平成二)、早稲田大学図書館は近代作家の自筆原稿コレクションを購入した。明治・大正から昭和にかけて活躍した詩人・歌人などの自筆原稿九十六点、色紙二十四枚、扇面一枚および書簡一通からなる貴重な一次資料である。資料一点一点の書誌・所蔵情報は既に早稲田大学図書館の統合検索システム「WINE」^①に登録されている。それと連携する早稲田大学「古典籍総合データベース」^②によって、原稿の多くはカラー画像をオンラインで閲覧することができる(著作権等への配慮のため、一部の資料は画像未公開)。

自筆原稿のうち三点には掲載誌特定の手がかりがある。すなわち、川田順「遠来の人」(原稿22)の余白に「『スバル』7月号掲載」、西条八十「軍歌」(原稿32)に「『スバル』原稿」、原阿佐緒「低声に」(原稿63)に「スバル」との書き込みである。また、資料を受け入れた当時の特別資料室のカード目録に、「近代作家原稿・色紙 雑誌『スバル』(第二期)等掲載原稿等(原稿九六篇・色紙一七枚)(一九三〇年頃)」と記されていることから、整理時点で少なくとも一部

『早稲田大学図書館紀要』第六十九号(二〇二二年三月)

の掲載誌は特定されていたことがわかる。

これらを踏まえ調査した結果、本コレクションに含まれる自筆原稿九十六点のうち、九十五点は同一の文芸雑誌『相聞』（第二巻第一号以降は『スバル』と改題³）（図1）の創刊号から第三巻第一号までのうちに掲載された作品であり、残る一点、与謝野晶子「白孔雀短歌五首」（原稿90）は『相聞』と同じ出版社（太白社）から刊行された九條武子の歌集『白孔雀』⁴に序歌として収録されていることが判明した（図2）。

『相聞』・『スバル』は、歌人の吉井勇（一八八六—一九六〇）が中心となって一九二九年（昭和四）に創刊した詩歌文芸雑誌である。早稲田大学中央図書館では、自筆原稿の関連資料としてこの雑誌を収集し、自筆原稿の作品が掲載されたものを含め、創刊号からほぼすべての巻号が揃っている⁵。なお、一九三二年（昭和七）七月の第四巻第二号刊行から二年九ヶ月の休刊を経て一九三五年（昭和十）四月に出版者・編集者を代えて復刊された『スバル』第五巻第三号については入手できず、京都府立京都学・歴史館の「吉井勇資料」により確認した⁶。それ以降の刊行の有無は不明であり、まもなく終刊したものである。

本原稿コレクションは、著名な詩人・歌人の自筆原稿を数多く含むため、その一点一点に目が行きがちであるが、実は、掲載誌と出版社を同じくする正に一括の資料であり、吉井勇および数名の同人編集に係る原稿群である⁷。

本稿では、まず、掲載誌『相聞』・『スバル』について、歌人吉井勇が人生のどのような時期にこれを主宰・編集していたのかを含め、刊行の経緯を説明する。その上で、自筆原稿と掲載作品を対照することにより、コレクションの概容を示す。今後の資料利用や研究のための手掛かりとなれば幸いである。

掲載誌の『相聞』・『スバル』を紹介するにあたり、主に、以下二点の研究書を参考にした。歌人・文学研究者であり、『吉井勇全集』⁸や『定本 吉井勇全集』⁹の編集・解説にあたった木俣修による『吉井勇研究』¹⁰には、雑誌創刊の

経緯から『スバル』への改題とその終焉に至るまでの、休刊と復刊を含むおよそ六年間にわたる刊行の変遷がまとめられており、雑誌の全体像を捉えることができる。木俣は、この雑誌を評して、「サロン風な高踏的な趣味雑誌としてはまことに楽しいものであったが、回顧的な記事などが多く、新しい風潮をまきおこすようなものは何もなかったために、文壇・詩歌壇にもたらしたものはなく、読者の範囲も一種の好事家の域にとどまった。」と述べている。¹¹⁾ 同書の前年に刊行された『日本近代文学大事典』第五卷の「相聞」の項も木俣による執筆であり、同様の見解が記されている。¹²⁾ 日本近代文学研究者の紅野敏郎による大正・昭和初期の文芸雑誌の研究書『文芸誌譚 その「雑」なる風景 一九一〇—一九三五年』には、創刊号巻頭の高村光太郎(図3)をはじめとする寄稿者らと吉井勇との関わりに触れながら、『相聞』・『スバル』の誌面が読み解かれている。¹³⁾

歌集『白孔雀』については、ここで簡単に紹介しておく。佐佐木信綱(竹柏会)に学んだ歌人九條武子(一八八七—一九二八)の遺稿を九條家の委嘱を請けて吉井勇が編集し、一九二九年(昭和四)十二月に太白社から出版した追悼歌集である。武子は一九二三年(大正十二)の関東大震災で自らも被災しながら、救援・復興事業に奔走していたが、一九二八年(昭和三)二月七日、病により四十二歳の若さで亡くなった。¹⁴⁾ 本書には、竹柏会の先輩である与謝野晶子が序歌(原稿90)を寄せ、親友の歌人柳原燐子(白蓮)と編集の吉井勇が跋文を書いている。太白社の二冊目の歌集『白孔雀』と同月に刊行予定であった『相聞』十二月号は休刊となり、翌一九三〇年(昭和五)一月、雑誌は『スバル』に改題して刊行された。その新年号の「編輯後記」には、十二月号を「突如休刊することにした」ことについて、「単行本の出版と新年号の準備のために時間的の余裕を十分に持ちたいために、止むを得ずやつたことである。」との弁解を出版者兼編集の西村酔香が記している。¹⁵⁾

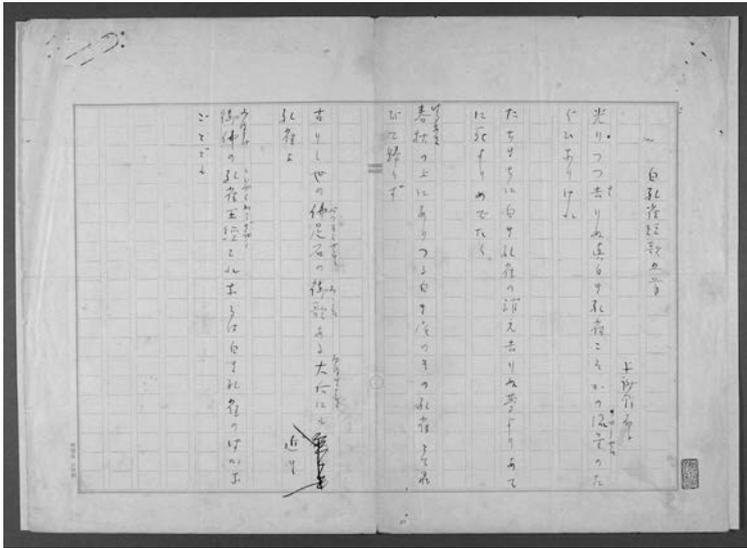
〈図1〉『相聞』・『スバル』表紙（サヘ 1475）



左上『スバル』第三卷第一号
左下『スバル』第四卷第一号

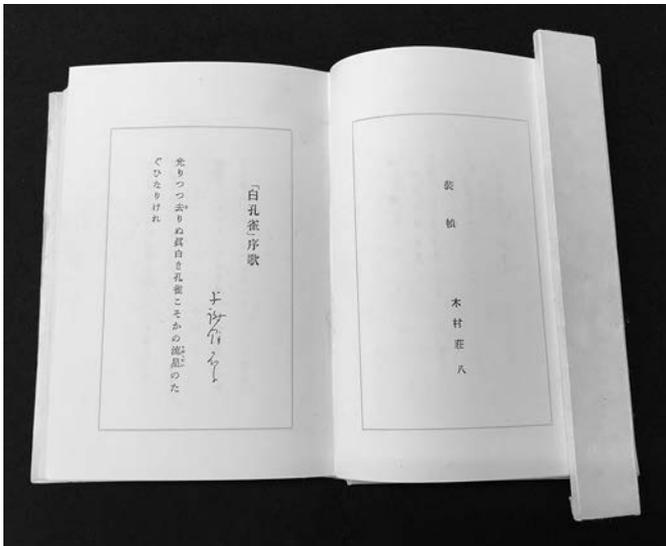
右上『相聞』第一卷第一号
右下『スバル』第二卷第一号

〈図2-1〉自筆原稿90 与謝野晶子「白孔雀短歌五首」(へ2 8100 90)

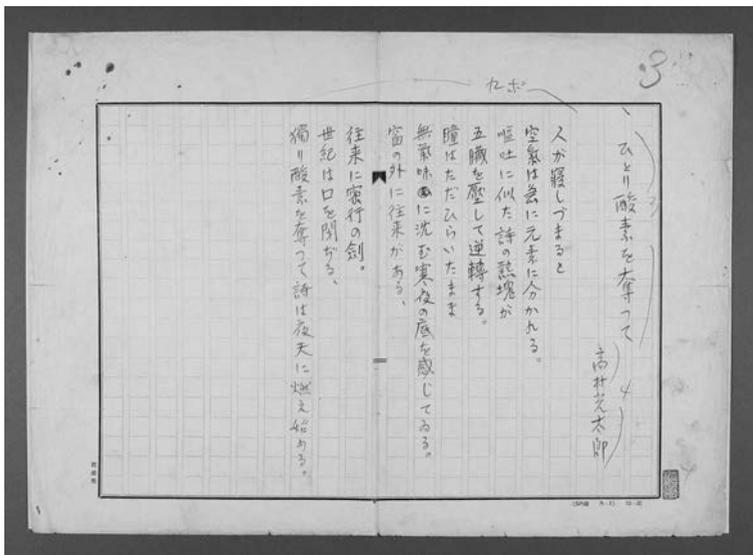


早稲田大学
図書館所蔵
吉井勇主宰詩歌文芸雑誌『相聞』・『スバル』の自筆原稿コレクション

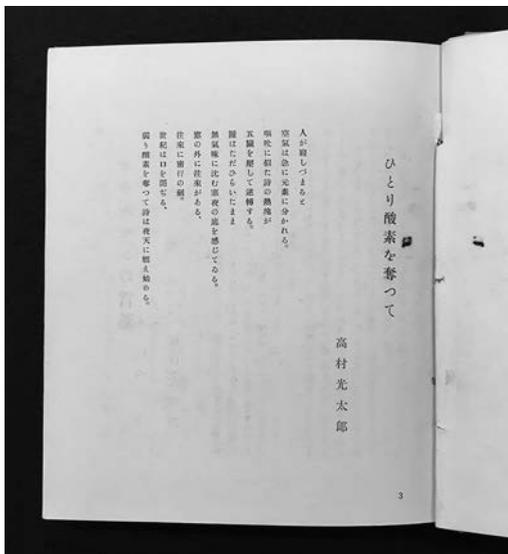
〈図2-2〉掲載頁 与謝野晶子『「白孔雀」序歌』冒頭
九條武子『白孔雀』(911.16 806)



〈図3-1〉 自筆原稿41 高村光太郎「ひとり酸素を奪って」(へ2 8100 41)



〈図3-2〉 掲載頁 高村光太郎「ひとり酸素を奪って」
『相聞』第一巻第一号 三頁(合本版)(サハ 1475)



一 主宰者吉井勇

歌人吉井勇（一八八六一—一九六〇）が文芸雑誌『相聞』を主宰創刊したのは、一九二九年（昭和四）、四十四歳のときである。この雑誌の主宰・運営に至るまでの彼の人生を少し遡ってみよう。¹⁶⁾

吉井勇は、一九〇五年（明治三八）五月、二十歳のとき、与謝野寛（鉄幹）が主宰する新詩社の文芸誌『明星』¹⁷⁾に短歌を発表して文壇デビューした。同年四月、早稲田大学高等予科文科に入学するが、ほとんど出席しなかったらしく、一九〇七年（明治四〇）九月に政治経済科に転科し、結局、翌年六月に中退する。一九〇八年（明治四十二）一月の北原白秋、木下杢太郎、長田秀雄、長田幹彦、秋葉俊彦らとの新詩社連袂脱退と同年十一月『明星』終刊の曲折を経て、一九〇九年（明治四十二）一月に森鷗外監修のもとに創刊した『スバル』¹⁸⁾（以下、太白社刊の『スバル』との区別のために傍点を付す）では、当初、平野萬里、石川啄木とともに編集にあたる。同誌に恋愛歌を中心に抒情的な短歌を発表し、代表作となる第一歌集『酒ほがい』¹⁹⁾をはじめ続々と歌集を出版する。一九〇八年（明治四〇）に新詩社脱退組や美術雑誌『方寸』の石井柏亭、森田恒友、山本鼎らとおこした「パンの会」は、歌人・詩人・芸術家ら耽美派の拠点となり、勇は彼らと広く親交を結ぶ。一九〇九年（明治四二）、『スバル』第三号に戯曲「午後三時」を発表してからは、一九一四年（大正三）頃まで戯曲の執筆にも励み、自作の上演を通して演劇界に関わりを深める。

こうして文壇や演劇界・美術界などに拮据してきた勇の人脈は後に主宰する雑誌に大いに寄与することとなる。自筆原稿のある作家だけを見ても、『明星』・『スバル』系の与謝野明子、高村光太郎、中原綾子、北原白秋、木下杢太郎、長田秀雄、茅野肅々、平野萬里、堀口大學ら、『方寸』の石井柏亭、劇作家の小山内薫、久保田万太郎、中沢臨川、南江二郎、このほか、三上於菟吉、西条八十、芥川龍之介、吉田絃二郎、小島政二郎、新居格、泉鏡花、野口米次郎、

水上瀧太郎、佐藤春夫、武者小路実篤、有島生男、谷崎潤一郎、高濱虚子、室生犀星、正宗白鳥、眞山青果、竹久夢二、吉屋信子など、錚々たる寄稿者が名を連ねている。

しかし、大正期に入ると勇の人生は停滞の様相を帯びてくる。一九一三年（大正二）十二月、活躍の場となつてきた『スバル』が五年間の歴史を閉じる。一九一四年（大正三）六月に中沢臨川、小山内薫とともに雑誌『文芸復興』²⁰を創刊するが、翌月、わずか第二号をもつて廃刊となる。歌作については、一九一六年（大正五）八月、赤木桁平が『読売新聞』に「遊蕩文学の撲滅」を発表し、放蕩生活を送り祇園詩人、紅燈歌人ともてはやされてきた勇もまた糾弾対象の一人となつた。²¹ 劇文学の振興を目指して創立した国民文芸会を母体として、一九一九年（大正八）十一月に里見弾、久米正雄、田中純らと文芸雑誌『人間』²²を創刊、戯曲その他を発表するが、一九二二年（大正十）六月に第二十四号をもつて廃刊となる。同年五月、勇は三十六歳で伯爵柳原義光の二女徳子（二十二歳）と結婚する。²³ その後、長男の誕生、新居での関東大震災、隠居した父からの家督（伯爵位）継承、父の死、と私生活での変化が相次ぐことになる。後年、勇は日本経済新聞の連載「私の履歴書」のなかで当時の境遇について、「『人間』廃刊後の私は、結婚の失敗やら何やらで、生活は乱雑荒廃をきわめ、多くは旅で過ごす流離三昧、遂には文壇からも疎くなくて、だんだん落魄の道をたどっていくようになった。大正十五年五月、父幸蔵が隠居をしたので家督相続をしたが、父の負債まで引き受けなければならなかつたので、家計はだんだん窮迫して、昭和三年三月には、角筈にあつた邸宅も売り、借家生活をするようになった。そうなるのだんだん交友も少なくなつたので、東京にも居辛くなり、私はたつた一人で神奈川県下の南林間都市に住んでいたが、そこにも落着くことができず、ほとんど旅で暮らすようになってしまった。」と述べ、続けて一九二九年（昭和四）年から一九三四年（昭和九）にかけて重ねた旅とその後の土佐隠棲について記しているが、当時主宰刊行していた筈の『相聞』・『スバル』に関する記述はない。²⁴

勇がかつて携わった雑誌編集についても触れておく。先の『スバル』の編集時代を知る資料としては『啄木日記』²⁵がある。明治四十二年新春から、啄木は編集方針に関する平野萬里との対立や勇の編集者ぶりについて書いている。創刊直後の日記には「与謝野氏はスバルの前途を悲観してゐた。主要なる話はスバルに關した事であつた。(中略)予は平出君を訪ねた。話はこゝでもスバルの事。予は編輯を各月担当者に全責任を負はせる事を説いた。(然し吉井君には任せられない。アノ人は仕事の人ではないから。)」と平出君が言つた。」とあり、『スバル』出資者の平出修がいみじくも勇の性質を言い当てている(明治四十二年一月一日)。啄木は自分の担当の第二号について、勇が「スバルの原稿、受持ちの方を一つも集めてゐなかつた。」(一月十七日)とぼやく。第三号は勇の担当だったが、「吉井から、境遇に激変ありしたため昂の編輯出来ぬといふハガキ」(二月一日)が来て、太田正雄(木下李太郎の本名)が急遽編集を委託され、散々苦勞の末に啄木に助力を求め、愚痴ももらしている。「モウく編輯はせぬ——馬鹿は二度編輯しろ——と太田が言つてゐた。」(二月二十六日)。さらに、「四号は吉井がやるさうだ。予は近頃實に吉井がイヤになつた。」(三月十一日)とあるが、勇は三月末になつて間に合わない、手伝つてくれと連日啄木に泣きつき、本来の刊行日に至つては、「社から帰ると吉井から今夜きて助けてくれのハガキ。イヤだと予は思つた。」(四月一日)と、勇の無責任さに辟易した啄木の気持ち吐露されている。結局、第四号は数日遅れで出来し、啄木の手元に届く(四月五日)。このように、啄木から見た若き日の勇は全くあてにならない編集同人であつた。以降、『スバル』の編集責任は主に江南文三などが担い、勇は一九一一年(明治四十四)の第三卷第一号から戯曲関連の付録編集に携わるが、廃刊を迎えるころには『スバル』から遠ざかつていた。²⁶『スバル』廃刊の翌年一九一四年(大正三)五月、勇は鎌倉坂之下で湘南新詩社をおこし、詠草添削を行うが、自ら雑誌は作らず、『スバル』の後継誌『我等』や『三田文学』への寄稿とした。大正期に入つてから創刊・編集に携わつた雑誌については、前述の通り、『文芸復興』は二号で廃刊、『人間』は文芸

講演旅行などの楽しみもあったが、勇自身の言によれば、「やつぱり素人の商売で、内容はそう悪くはなかったのだけれども、経営の方がうまくいかず」⁽²⁷⁾一年七か月で廃刊となってしまった。作品発表や交流の場である文芸誌立ち上げへの意欲とは裏腹に、気ままな勇が編集事務や事業の運営には向いていなかったことが察せられる。

二 『相聞』・『スバル』刊行の経緯

1 創刊

一九二九年（昭和四）六月に刊行した『相聞』創刊号巻末の「編輯後記」には、主宰の勇、共に編集にあたる同人の中原綾子、榛禮吉、編集兼出版者の西村酔香ら四人の抱負が語られている。その後いずれの号でも編集者全員が編輯後記に所感を記しており、運営の方針や苦勞、彼らの消息をうかがい知ることができる。創刊にあたり勇は、「私が自ら編輯の衝に当つて、短歌を中心とする雑誌を出すのは、今度のこの『相聞』が始めてである。元来私は短歌ばかりでなく凡ての芸術は、教へるべきものではなく、自ら会得すべきものであると思つてゐたので、十数年前鎌倉に住んでゐた湘南詩社時代に、社友の詠草に対する添削批評を試みただけで、その後はさう云ふことから出来るだけ遠ざかつて来たのであつた。が、人生の機縁はここに『相聞』を創刊すると同時に、同好の士の詠草に対しても、再び添削批評の筆を執らなければならないやうな事になつたのである。（中略）兎に角私はこの『相聞』を中心として再び短歌に精進する。」と書いている。大正期には戯曲等、歌作以外の活動に邁進し、戯曲中心の文芸誌創刊に携わつた勇であつたが、あらためて短歌に主軸を戻すという宣言である。一方で、長崎への旅行のため、編集や添削批評によく携われなかつたことを詫び、「第二号からは昔石川啄木とともに『スバル』を編輯した当時のやうな意気と情熱とを以て、その衝に当る決心である。」と述べる。⁽²⁸⁾創刊号については、勇も禮吉も旅行、綾子は編集途中で本人や家

人が病にかかったため、酔香が苦勞して刊行にこぎつけたという。その分、酔香の編輯後記は一ページ余の饒舌さで、文面には出版者としての気負いも感じられる。⁽²⁹⁾

吉井勇主宰の詩歌雑誌との宣伝や執筆陣の豪華さもあり、創刊号は数日にして太白社の手持ちが品切れとなり、氣をよくした酔香は第二号を倍数に増刷する。勇は毎月のように、時には同人とともに、旅行に出かけながらも、編集、執筆、社友から投稿された詠草の添削にあたる。旅先の土地を雑誌の特集として取り上げることもあった。⁽³⁰⁾

2 『スバル』への改題

創刊の翌年一九三〇年（昭和五）一月、勇は誌名を思い入れのある『スバル』に改める。「編輯後記」では、「今度思ひ切つて『相聞』を『スバル』と改題、新年号から外形内容をもとに新しくして、純芸術的詩歌文芸雑誌として、一大飛躍を試みることになった。『スバル』と云ふ名前は、本誌に掲げた小生の『耽々亭雑誌』にも書いて置いた通り、かなり歴史的なものであつて、私が自分で編輯する雑誌の名前としては、最適当なものであると信ずる。が、私は徒らに回顧的な心持で、この雑誌に、『スバル』と云ふ名前を附けたのではない。私はもつと躍進的な心持で、この雑誌を編輯すると同時に、将来はこの『スバル』を光輝燦たる雑誌界の新しい明星としたいと思つてゐるのである。勇猛精進と云ふ言葉は、私がこの雑誌を編輯する上の標語である。」⁽³¹⁾と高らかに志を述べている。勇は連載の「耽々亭雑誌」(六) (十)において、自身の青春時代に活躍の場となった『スバル』を「第一次昴時代」として振り返っている。⁽³²⁾同年六月号の「編輯後記」では、「兎に角もう少し内容を充実したものにして、第一次『スバル』のやうな足跡を、たとへ文壇の片隅でも残して置きたい。」と幾分トーンダウンしている。⁽³³⁾

改題した『スバル』第二巻第一号から、編集は勇と酔香の二人で行うことになった。『スバル』への改題の結果は、「『相聞』時代とは比較にならないほどの売行」⁽³⁴⁾であつたという。その後、社友や購読者の拡充を画策しながら刊行を

進めるが、次第に「編輯後記」に刊行の遅れに関する記述が目につくようになる。

3 太白社から相聞社へ

一九三一年（昭和六）の新年に出した第三卷第一号刊行から半年間の休刊を経て、同年七月に刊行した第三卷第七号からは、創刊より出版・編集を支えてきた太白社・西村酔香と離れ、勇は相聞社として自身で編集・出版を行うことにする。詳細はあきらかにされていないが、社友の詠草の扱いについて問題が生じたようである。酔香との決別について、勇は次のように述べている。「今度は名義だけでなく、編輯も経営も、全部私自身でやる（…中略）それから、茲ではつきり断つて置くが、従来『スバル』の経営及び編輯をやつてゐた酔香西村久一郎君は、今度の『スバル』及び相聞社とは、何等の關係を持たない事になつた。」⁽³⁵⁾

短歌中心の文芸誌に軌道修正し、勇の独力により七月から十一月までは月一回の刊行を守り頑張つたが、十一月・十二月は合併号となり、二ヶ月の休刊の後、一九三二年（昭和七）三月の第四卷第一号（春季号）では刊行方針を改める。「今後『スバル』は年四回発行とし、その間今度創刊する雑誌「分身」を、年八回出すことにする。（中略）『スバル』は従来のもものよりもやや高踏的な純文芸雑誌とし、『分身』は主として社友の詠草や消息等を掲載する、安易な心持で読むことの出来るものになりたい。」との変更である。⁽³⁶⁾

しかし、『分身』はすぐに廃刊となり、次の第四卷第二号（夏季号）をもって『スバル』は二年半以上に及ぶ長い休刊に陥る。その間、一九三三年（昭和八）十一月に発覚した妻徳子のスキャンダル⁽³⁷⁾により公私共に大きな痛手を負つた勇は、旅に逃れ、土佐に隠棲する決意をかためるのである。

4 復刊と終焉

一九三五年（昭和十）四月に『スバル』は復刊を果たすが、勇は土佐隠棲中を理由に大鹿卓に刊行を託して編集か

からも退く。『スバル』を休刊してもう二年以上になつてしまつた。その間いく度か再刊をすゝめられましたが、自分の心境がさうした対人的な仕事よりも孤独を欲してゐたので、今日に至つたのである。いよいよ復活することになつても、自分は遠く海南土佐の地に隠棲してゐるので、実際の事務はすべて在京の大鹿卓、榛禮吉、牧野勝彦、堀山榮二の諸君がやつてくれることになつてゐる。³⁸と述べ、その号に戯曲一作を発表するが、やがて雑誌の刊行は途絶える。一九三七年（昭和十二）の再婚を機に勇は隠棲から復帰し、翌年十月、土佐から京都に居を移す。生活も仕事も復調していくが、その後、吉井勇の雑誌『スバル』が復刊することはなかつた。

三 出版運営

延べ六年にわたり、文芸誌『相聞』・『スバル』はどのように運営されていたのだろうか。雑誌の奥付、編輯後記、巻末の告知、付録のパンフレット等には、雑誌を盛り立て、刊行を継続するためのさまざまな工夫が見受けられる。それらの記述をもとに、同誌の刊行と出版社の動きを時系列に見てみる。参考として、「編輯後記」および「消息」にあらわれる勇の消息も添える（行頭に◇印を付し、典拠は「巻一号」の形で略記した）。

一九二九年（昭和四）

五月、『太白パンフレット』発行。

太白社を運営する西村酔香が、同社から出版されることとなつた吉井勇の新雑誌『相聞』の創刊を告知。³⁹

◇「九州地方へ長途の旅」（二一）

六月、『相聞』創刊。第一巻第一号（創刊号）刊行。

西村久一郎（醉香）の営む太白社（東京市京橋区木挽町）から出版。印刷は、株式会社一色活版所。毎月一回一日発行、定価四十銭。編集者は、吉井勇、中原綾子、榛禮吉、西村醉香の四名。変形栞形本。表紙・扉は木村莊八（以後、表紙は全て木村莊八）。

七月、『相聞』第一卷第二号（七月号）刊行。

倍數に増刷。附録に『太白パンフレット』（同年七月刊）。「太白社代理部のこと」にて封筒などの物品販売や歌会を告知。「太白社清規」にて社友を募集。社友社費一ヶ月金五十銭（三ヶ月分以上を前払い）により、社友は短歌十種以内の投稿ができる。

太白社に「相聞観劇会」を組織、七月十五日第一回を明治座で開催。

八月、『相聞』第一卷第三号（八月号）刊行。

太白社事務所移転（東京市京橋区三十間堀）。

関西支社、甲府支社創立。

◇「榛、西村の両君とともに、「八月三日から」五日間ばかり、甲州から静岡、伊豆方面へ旅。」（二一四）

九月、『相聞』第一卷第四号（九月号）刊行。

本号に限り特価五十銭。刊行遅延の対策として印刷所変更（皓明社印刷所）。附録に『太白パンフレット』。「太白社々友清規」にて、太白社維持会設置の告知（特会費一口金十円）。直接購買者募集。二度刷の『相聞』ボスター作製。

◇「八月の末から九月の始めにかけて一週間ばかり西村、榛の両君とともに京都、大阪、奈良、名古屋方面へ、極めて慌ただしい旅行。」（二一五）

十月、『相聞』第一卷第五号（十月号）刊行。

定価五十銭（値上）。

十一月、『相聞』第一卷第六号（十一月号）刊行。

印刷所変更（太白社印刷所）。直通電話架設（銀座六〇八九番）、同人その他に二人の事務員を置く。

中原綾子歌集『みをつくし』、岡本一平作画集『新水や空』二巻を刊行。観劇会於明治座。

十二月、『相聞』休刊。観劇会於明治座。

九條武子歌集『白孔雀』刊行。

一九三〇（昭和五年）

一月、『相聞』改題、『スバル』第二卷第一号（一月号）刊行。

編集は吉井勇、西村酔香（以降、この二名）。卷末「太白社代理部だより」に太白社書籍部開設（一般書籍の取

次販売開始）の告知。

二月、『スバル』第二卷第二号（二月号）刊行。

二月号から増刷。

三月、『スバル』第二卷第三号（三月号）刊行。

◇「この間大阪へ往つた時には、同地に於ける社友諸君から望外の歓迎を受けた。」（二一四）

◇「三月三十日の夜に東京を發つて、永田龍雄、水木伸一、足立直郎等の諸君と四国「宇和島・松山」へ往つた。（中略）私はまたそれから神戸で一行と別れ、播州赤穂へ出懸けて往つた。」（二一五）

四月、『スバル』第二卷第四号（四月号）刊行。

二十日、吉井勇歌集『鸚鵡杯』刊行。

五月、『スバル』第二巻第五号（五月号）刊行。

六月、『スバル』第二巻第六号（六月号）刊行。

維持会員の大募集開始。

十七日、第四回観劇会於新橋演舞場。二十四日・二十六日、第六回スバル観劇会於新橋演舞場。

『現代新選女流詩歌集』刊行。

◇「六月上旬東京発にて別府宮島、赤穂、岐阜を経て十日帰京した。」（二一七）

七月、『スバル』第二巻第七号（七月号）刊行。

改版（菊版）。定価四十銭（値下）。同人の「消息」記載。

八月、『スバル』第二巻第八号（八月号）刊行。

合本『相聞』一・『スバル』一を発売、頒価各三円宛。第七回スバル観劇会十三日於歌舞伎座・十四日於帝

国劇場。

◇「八月六日東京発にて関西へ旅行、高野山、及宇和島に遊び二十八日帰京。」（二一九）

九月、『スバル』第二巻第九号（九月号）刊行。

五日・十八日観劇会於新橋演舞場。

◇「九月九日より伊豆長岡温泉小松屋に滞在」（二一十）

十月、『スバル』第二巻第十号（十月号）刊行。

「短歌本意で編輯」。観劇会、六日於新橋演舞場・十八日於歌舞伎座。原阿佐緒『黒い扉』刊行予定。

◇「十月九日伊豆長岡温泉より帰京十月廿六日より神奈川県高座郡南林間都市長田別荘に引籠原稿執筆。」(二一
—十二)

十一月、『スバル』第二卷第十一号(十一月号) 刊行。

堀口大學『キュピドの籠』刊行。

十二月、『スバル』十二月号急遽休刊。

初句、野城艶子『虹の跡』刊行。

一九三二年(昭和六)

一月、『スバル』第三卷第一号(新年号) 刊行。

定価金五十銭。新合本『スバル』二を発売、特価二円。

二月、六月、『スバル』休刊。

◇「二月から五月まで、凡そ三ヶ月の間と云ふものは、殆ど旅三昧」(三一三「相聞居雜記」)

七月、『スバル』復刊。第三卷第七号(復活七月号) 刊行。

定価四十銭。酔香の太白社を離れ、編集兼発行者は吉井勇、発行所は相聞社(東京市芝区兼房長九番地)となる。

八月、『スバル』第三卷第三号(八月号) 刊行。

これまでに預かっていた詠草は大体今号に発表(極少数は次号)。

◇「去月「八月」下旬に甲州下部温泉に十日ばかり往つて仕事をしてゐた」(三十一)

九月、『スバル』第三卷第九号(九月号) 刊行。

詠草が多くなつたため、増頁。

◇「九月下旬から小田急沿線の南林間都市に来てゐる。」(三十一、二)

十月、『スバル』第三卷第十号(十月号)刊行。

発行所移転、相聞社(神奈川県鎌倉町扇ヶ谷二十一番地)。「相聞社々友清規」に、社友の社費一ヶ月金五十銭、「スバル」維持会員規定一口会費金十円。社費半年分の払込により出版物贈呈の特典。柳原白蓮が一門を率いて同人格となつて援助。

十二月、『スバル』第三卷第十一、二号(十一月・十二月合併号)刊行。

「消息抄」を設け社友の通信を掲載。

一九三二年(昭和七)

三月、『スバル』第四卷第一号(春期号)刊行。

定価五十銭。発行所移転、相聞社(神奈川県高座郡大和村下鶴間三三〇〇)。年四回発行。「分身」を創刊、年八回刊行とする。改版(枳形本に戻る)。

七月、『スバル』第四卷第二号(夏季号)刊行。

『分身』は五月号をもつて廃刊。

八月以降、『スバル』休刊。

一九三五年(昭和十)

四月、『スバル』第五卷第三号(復活号)刊行。

出版は大鹿卓・昴社(東京市牛込区余丁町二二三)。隔月刊、定価五十銭。「スバル社清規」(社友は社費半年分一圓五十銭前納)と「維持会員」の案内は、ほぼ以前を踏襲。

◇「海南土佐の地に隠棲」(五十一三)

十月、石川幸三郎が『スバル』をやるという予告パンフレット発行(失敗に終わる)⁽⁴⁰⁾。

これまで見てきたように、『相聞』・『スバル』の出版社は太白社、相聞社、昂社と変遷した。とりわけ多彩な活動を行っていたのは太白社時代で、雑誌刊行のみならず、パンフレット発行、歌会や観劇会の主催、物品販売、一般書籍取次、寄稿者の著作の出版など、幅広い事業を行っている。また、社友制度・維持会員制度(これらは後継の二社でも踏襲される)のもと、地方支社設立、直接販売、雑誌の合本販売など、様々な営業努力もなされた。これらの企画や事務は、『編輯後記』の記述を見ると、経営者である酔香が主に担っていたと思われる。一方、『編輯後記』や随筆に記される勇の消息には、刊行の間を縫うように旅に出かける様子がかがえ、歌作や執筆、詠草の添削に加えて、編集作業にどれほどの力を注いだらうかと思わせる。太白社刊行の終盤の「編輯後記」には、刊行や詠草添削返送の遅れについての詫びや自戒の言葉がたびたびあらわれるようになり、第三巻第六号を最後に、酔香および太白社は『スバル』の運営から離れるのである。

太白社からの『スバル』刊行がすでに停止した一九三二年(昭和六)の二月、吉井勇は『短歌入門』⁽⁴¹⁾という小冊を誠文堂から出版する。『定本 吉井勇全集』によれば、「勇の唯一の歌作指導書」である。詠草添削批評の経験を下地としたという意味では、『相聞』・『スバル』刊行の果実と言えよう。語り口の柔らかい入門者向けの内容で、「誠文堂文庫」の一冊として版を重ねた。巻末に入れた「歌がたり二三 私の歌の半生」の締めには、「私なども歌を作り始めてから三十数年、今猶神奈川県高座郡大和村南林間都市二條通りに相聞社を置いて、そこから出している第二次の雑誌『スバル』を主宰しながら、歌に対する精進を社友諸君とともに続けてゐる訳なのであります。」⁽⁴²⁾と、主宰雑誌

への言及もある。

しかし、相聞社からの『スバル』刊行は、勇の努力虚しく、半年間に五冊、翌年春・夏の二冊を出して休刊となる。これに勇の私生活の事情が大きく影響したことは前に述べた通りである。

四 早稲田大学図書館所蔵『相聞』・『スバル』掲載自筆原稿 目録

本目録では、自筆原稿を請求記号の小番号の通り、著者名五十音順に排列し、掲載誌と対照した。色紙・書簡については、出版物への掲載の有無は不明のため、資料情報のみとする。

数量 自筆原稿九十六点、色紙二十四枚、扇面一枚、書簡一通

(凡例)

- ・ 請求記号(ヘニ 八一〇〇)の小番号、著者「原著者の補記」、表題、種別、数量、用紙、原稿についての注記、著者・編集者書入(ただし、活字・配置・頁の指定を除く)、掲載誌巻号、刊行年月、掲載頁、掲載についての注記、その他。
- ・ 旧仮名遣いは原稿記載のままとし、一部、新字体を用いた。
- ・ 原稿一点に複数の作品が含まれる場合は、「表題」のもと()内に補記した。
- ・ 「古典籍総合データベース」で画像が閲覧可能な資料には、小番号の下に「*」を付した(二〇二二年十二月時点)。

- 1 有島生馬「嫂を憶ふ」草稿三枚 四百字詰「東京 文房堂製」
『相聞』第一卷第四号・九月号 昭和五年九月 三〜五頁
- 2 有島生馬「ピラミッドとスフィンクス」草稿四枚 四百字詰「東京 文房堂製」
『スバル』第二卷第六号・六月号 昭和五年六月 十二〜十四頁
- 3 生田花世「夕月」歌稿二枚 四百字詰「松屋特製」
『スバル』第二卷第九号・九月号 昭和五年九月 四十八頁
- 4 * 生田春月「嘘のまこと」詩稿二枚 四百字詰「松屋特製」
『スバル』第二卷第五号・五月号 昭和五年五月 四十四〜四十五頁
- 5 石井柏亭「名栗川」歌稿一枚 四百字詰「東京 文房堂」
『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 二十一頁
- 6 * 石樽千亦「濱なす」歌稿三枚 二百字詰「海 原稿用紙」
『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 四十二〜四十三頁
- 7 * 石原純「上田穆氏の新短歌集『街の放射線』に題す」草稿二枚 四百字詰「東京 文房堂製」
『スバル』第二卷第四号・四月号 一九三〇年四月 三十四〜三十五頁

- 8* 今井邦子「泰山木の花」歌稿二枚 四百字詰「東京 文房堂製」
『スバル』第二卷第七号・七月号 一九三〇年七月 三十六〜三十七頁
- 9* 江南文三「郊外銀座風景」草稿十八枚 二百字詰「中野 江藤製」文末に日付「(一九三〇年三月十六日)」
『スバル』第二卷第五号・五月号 一九三〇年五月 十六〜二十頁
- 10* 江南文三「島に人に」歌稿三枚 二百字詰「中野 江藤製」
『スバル』第二卷第二号・二月号 一九三〇年二月 二十八〜二十九頁 目次に誤植「島と人と」
- 11* 江見水蔭「湯の山の今昔」草稿五枚 四百字詰「A1028 青山 三河屋紙店製」
『スバル』第二卷第七号・七月号 一九三〇年七月 四十〜四十二頁
- 12 円地文子「れたあ・ぺえぱあのこと」草稿四枚 四百字詰「東京 文房堂製」日付「(一九三〇・五・十六)」
『スバル』第二卷第六号・六月号 一九三〇年六月 三十八〜三十九頁
- 13 大木篤夫「金色の棺車によせて」詩稿二枚 四百字詰「東京 文房堂製」日付「一九二九・六・十二」消し
『相聞』第一卷第二号・七月号 一九二九年七月 二十二〜二十三頁
- 14* 岡本綺堂「春五題」句稿一枚 四百字詰「MARUZEN」
『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 九頁

- 15* 岡本綺堂「ヂプシイとブリュー・ベル」草稿四枚 四百字詰「三省堂原稿紙」
『スバル』第二卷第七号・七月号 一九三〇年七月 二十六～二十七頁
- 16 荻原井泉水「松の葉」句稿二枚 二百字詰「松屋製（SM印 B：2）」
『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 二十九頁
- 17* 小野燕子「新涼」句稿一枚 緑の縦罫十三行「東京丸の内 東京日日新聞社」タイトル「新涼」追加
『相聞』第一卷第五号・十月号 一九二九年十月 十一頁
- 18* 加藤武雄「年賀状」草稿八枚 四百字詰「四谷新宿甲州屋製」著者名「加藤武雄」・タイトル「年賀状」追加
『スバル』第二卷第二号・二月号 一九三〇年二月 三十～三十二頁
- 19* 加藤武雄「旅の歌」歌稿三枚 二百字詰「新宿 甲州屋特製」二首消し「石灰を灰にまきたるおもむきにさくらはわびしくもり日に咲く」・「びらう樹（じゅ）の森の四島にわが立ちて大古の声を青波に聴く（日向青嶋にて）」
『スバル』第二卷第五号・五月号 一九三〇年五月 十三頁
- 20* 金子薫園「鎌倉草舎吟より 霧の中に」歌稿二枚 二百字詰「新潮社」タイトル「霧の中に」追加
『相聞』第一卷第五号・十月号 一九二九年十月 三十頁
- 21 川路柳虹「シ子・ポエム一篇」詩稿一枚 四百字詰「松坂屋製」
『スバル』第二卷第八号・八月号 一九三〇年八月 十～十一頁 掲載タイトル「シネ・ポエム一篇」

- 22 川田順「遠来の人」歌稿一枚 四百字詰「コクヨ 65」 右上余白に「スバル七月号」(著者筆)
『スバル』第二卷第七号・七月号 一九三〇年七月 二十四～二十五頁
- 23* 岸田國士「空想の序文」草稿三枚 四百字詰「文祥堂製」
『スバル』第二卷第三号・三月号 一九三〇年三月 十六～十七頁
- 24* 北原白秋「新曲 海苔の香」詩稿三枚 四百字詰「東京 文房堂製」
『スバル』第二卷第三号・三月号 一九三〇年三月 十二～十四頁
- 25 北村喜八「歌をつくつた頃」草稿四枚 四百字詰「YH & CO」
『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 五十～五十一頁
- 26 北村壽夫「ネオンの雨」草稿四枚 四百字詰「相馬屋製」
『スバル』第二卷第五号・五月号 一九三〇年五月 四十～四十二頁
- 27* 木下柰太郎「長崎。室津。」草稿四枚 四百字詰「M. OTA」 毛筆及び朱筆修正(著者) 著者名「木下柰太郎」
追加、巻末に「(新長崎集の一)」を追加
『相聞』第一卷第三号・八月号 一九二九年八月 三～五頁
- 28* 國枝史郎「謔言に非ず」草稿五枚 四百字詰「東京 文房堂製」
『スバル』第二卷第七号・七月号 一九三〇年七月 四十三～四十五頁

- 29 久保田万太郎「山茶花」句稿一枚 四百字詰原稿用紙
『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 二十八頁
- 30* 甲賀三郎「隨想二三」草稿四枚 四百字詰「イーグル印刷作用紙」
『スバル』第二卷第七号・七月号 一九三〇年七月 四十六〜四十七頁 目次に誤字「斷層二三」
- 31 小島政二郎 [Ambrose Bierce 原著] 『悪魔の辞書』から」訳稿三枚 四百字詰「MARUZEN(4)」
『相聞』第一卷第二号・七月号 一九二九年七月 八〜九頁
- 32 西條八十「軍歌」詩稿三枚 二百字詰「相馬屋製」一枚目右余白に『スバル』原稿
『スバル』第二卷第四号・四月号 一九三〇年四月 三〜四頁
- 33 佐佐木信綱「長崎ぶり」歌稿一枚 四百字詰原稿用紙
『スバル』第二卷第二号・二月号 一九三〇年二月 十八〜十九頁
- 34 佐藤春夫「航空歌」詩稿一枚 四百字詰原稿用紙(青色・ピンク色罫)
『スバル』第二卷第三号・三月号 一九三〇年三月 八〜九頁
- 35* 下村海南「軽井澤」歌稿三枚 無罫葉半紙(一九二×十三・三三)
『相聞』第一卷第五号・十月号 一九二九年十月 六〜七頁

- 36* 杉村楚人冠「夜帰」草稿七枚 二百字詰原稿用紙(青色縦罫のみ) 日付「(九月四日)」「我孫子にて」を巻末に移動
 『相聞』第一卷第五号・十月号 一九二九年十月 四〜五頁 目次は「夜帰り」
- 37* 薄田泣菫「芥川氏の即興歌」草稿五枚 四百字詰 [SUCCESS]
 『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 三〜七頁
- 38 榛禮吉「身邊雜詠」歌稿五枚 二百字詰「銀座 伊東屋製」(綠色罫)
 『スバル』第三卷第一号・新年号 一九三一年一月 四十四〜四十五頁 六首未収録(原稿への指示は無し)
- 39* 相馬御風「越後より」草稿三枚 四百字詰「御風用箋」文末に日付「(九月二十九日)」
 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 十二〜十三頁
- 40 高濱虚子「夏五句」句稿一枚 二百字詰原稿用紙
 『相聞』第一卷第四号・九月号 一九二九年九月 二十三頁
- 41* 高村光太郎「ひとり酸素を奪つて」詩稿一枚 四百字詰「松屋製 S M印 A : : 1」(図2-1)
 『相聞』第一卷第一号・創刊号 一九二九年六月 三頁(図2-2)
- 42* 竹久夢二「夜曲」歌稿二枚(一枚の台紙に貼付) 二百字詰「SYONEN SANSOW」(黄色罫) 日付「(一九三〇・三・九)」
 『スバル』第二卷第四号・四月号 一九三〇年四月 三十九頁

- 43* 竹久夢二「たんぼりん」他（たんぼりん／静物／ゆふつき／ちよこれいと／あいさつ／屏風／女体風景／恋仲／指／裏道）
詩稿六枚 二百字詰「SYONEN SANSOW」一枚目に著者名「竹久夢二」・タイトル「低唱その二」追加、三枚目に著者名「竹久夢二」・タイトル「低唱」追加、三作品を消し（静物／あいさつ／恋仲）、文末の日付「（一九二九・十二・一）」消し
- 『スバル』第二卷第二号・二月号 一九三〇年二月 三十六～三十七頁 「低唱」（ちよこれいと／屏風／女体風景／指／裏道）
- 『スバル』第二卷第三号・三月号 一九三〇年三月 三十三頁 「低唱その二」（たんぼりん／ゆふつき）
- 44 田中純「旅の小景」草稿四枚 四百字詰「神楽坂 山田製」用箋
『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 四十四～四十六頁
- 45* 近松秋江「日光より」（雷雨／蔬菜）草稿三枚 四百字詰「神楽坂 山田製」「雷雨と蔬菜」を見出しに変更
『相聞』第一卷第四号・九月号 一九二九年九月 八～九頁
- 46* 遅塚麗水「成吉土汗料理」草稿三枚 四百字詰「新町 柏屋特製」
『相聞』第一卷第五号・十月号 一九二九年十月 八～九頁
- 47* 茅野雅子「一日高尾山にあそぶ」歌稿二枚 縦書二百字詰「1020クジャク印原稿紙」
『スバル』第二卷第二号・二月号 一九三〇年二月 三十四～三十五頁

- 48* 千葉亀雄「唐紙地獄」草稿四枚 四百字詰「小川町 池田紙店製」
 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 六〜八頁
- 49* 辻潤「うんざりする労働」草稿九枚 二百字詰「E形 イーグル印創作箋」
 『スバル』第二卷第四号・四月号 一九三〇年四月 三十六〜三十八頁
- 50 津田青楓「手賀沼舟遊」歌稿一枚 四百字詰原稿用紙
 『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 四十〜四十一頁
- 51* 出口王仁三郎「天恩郷」草稿五枚 二百字詰「和歌原稿用紙」(赤色野) 著者住所氏名の紫色のスタンプ消し
 『スバル』第三卷第一号・新年号 一九三一年一月 四十〜四十一頁
- 52* 戸川秋骨「墳墓の地」草稿八枚 二百字詰「MARUZEN III」
 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 十九〜二十一頁
- 53* 富田溪仙「カンバン繪」草稿七枚 「溪仙書箋」青色野二十行
 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 十六〜十八頁
- 54* 長田秀雄「昔の眼」草稿四枚 四百字詰「長田秀雄用箋」 「をはり」消し、「(新長崎集の二)」追加
 『相聞』第一卷第三号・八月号 一九二九年八月 十二〜十三頁

- 55* 中戸川吉二「十年」草稿五枚 四百字詰「松屋製 S M 印 A : : 1」(青色野) 日付「昭和四年十月 鎌倉にて」
タイトル「十年」追加
- 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 三十四〜三十六頁
- 56 中原綾子「短詩九章」(世の中/告白/噂/運命/お頭儀/冗談/喧嘩/朝顔/三匹ざる) 詩稿二枚 四百字詰「ほてい屋製」
- 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 三十二〜三十三頁
- 57 中原綾子「松風」歌稿三枚 二百字詰「白木原稿用紙」
- 『スバル』第二卷第三号・三月号 一九三〇年三月 四十九頁
- 58 中村屋湖「白樺細工の耳木兔」詩稿三枚 二百字詰「東京 文房堂製」
- 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 二十二〜二十三頁
- 59 南江二郎「詩二篇」(静に眠る前に/ぐらすのお家) 詩稿五枚 二百字詰「南江詩稿」(黄色野・ロゴと人物像の縁飾り)
日付「一九三〇年四月三日」
- 『スバル』第二卷第五号・五月号 一九三〇年五月 三十〜三十一頁
- 60* 新居格「鳩笛」草稿三枚 「高圓寺 榮進堂製」
- 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 三十〜三十一頁

- 61* 西村酔香「續浪華抄」歌稿二枚 四百字詰「銀座 伊東屋製」
 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 四十頁
- 62* 野口米次郎 [Arthur Davison Ficke 原著]「初代清信は語る(原筆者米國詩人フキッケ)」訳稿二枚 四百字詰「新
 町 柏屋特製」右余白に著者の添書「過日の翻訳、之にて仕上にて申候 ノグチ 二十一日 吉井様」消し
 『相聞』第一卷第五号・十月号 一九二九年十月 十四〜十五頁
- 63 原阿佐緒「低声に」歌稿二枚 四百字詰原稿用紙 一枚目右上余白に「スバル」とあり
 『スバル』第二卷第五号・五月号 一九三〇年五月 三十八〜三十九頁
- 64* 平野萬里「雪日作歌」歌稿一枚 四百字詰「穩田 山田特製」
 『スバル』第二卷第三号・三月号 一九三〇年三月 十五頁
- 65 堀口大學 [Gómez de la Serna. Ramón 原著]「天文学」訳稿五枚 四百字詰「MARUZEN」一枚目の右余白(今
 月グウルモンは休み)「消し」
 『スバル』第二卷第九号・九月号 一九三〇年九月 十八〜二十頁
- 66* 堀口大學「秋の思ひ」歌稿一枚 四百字詰「MARUZEN」
 『スバル』第二卷第十号・十月号 一九三〇年十月 十八〜十九頁
- 67 堀口大學 [Marie Laurencin 原著]「ロオランサン三章」(肖像／神祕な人／犬)訳稿四枚 四百字詰「MARUZEN」

- 『スバル』第二卷第四号・四月号 一九三〇年四月 十四〜十七頁
- 68 前田河廣一郎「感覺」草稿三枚 四百字詰「前田河廣一郎原稿用紙」
『スバル』第二卷第七号・七月号 一九三〇年七月 三十八〜三十九頁
- 69* 牧野信一「僕の運動」草稿五枚 四百字詰「神楽坂 山田製」(黄色野)
『スバル』第二卷第五号・五月号 一九三〇年五月 二十七〜二十九頁
- 70 正宗白鳥「若葉の頃」草稿三枚 「MARUZEN」用箋 タイトル「若葉の頃」追加
『スバル』第二卷第六号・六月号 一九三〇年六月 十〜十一頁
- 71 松根東洋城「秋五句」句稿一枚 二百五十字詰「渋柿社原稿用紙」(赤色野)
『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 九頁
- 72* 眞山青果「西鶴のつかつた文字」草稿十二枚 四百字詰「相馬屋製」日付「(昭和四年十一月)」
『スバル』第二卷第七号・七月号 一九三〇年七月 十七〜二十二頁
- 73* 眞山青果「西鶴のつかつた文字(續)」草稿九枚 四百字詰「相馬屋製」タイトルに「(續)」追加
『スバル』第二卷第八号・八月号 一九三〇年八月 十七〜二十一頁
- 74* 丸木砂土「女の足の指」草稿三枚 四百字詰原稿用紙(黄色野)

『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 三十八〜三十九頁

75 萬造寺齊「白馬より黒部へ」(雪溪／根深平／頂上遠望／下山／祖母谷／黒部溪流) 歌稿二枚 四百字詰原稿用紙

『スバル』第二卷第四号・四月号 一九三〇年四月 十八〜十九頁

76* 三上於菟吉「杜甫・白居易 原著」「唐詩譯稿」(杜甫「薄暮」／白居易「夜雨」・「秋日」) 訳稿二枚 四百字詰「神楽

坂 山田製」(黄色罫)

『スバル』第二卷第二号・二月号 一九三〇年二月 十四〜十七頁

77* 三上於菟吉「春秋」歌稿二枚 四百字詰「神楽坂 山田製」(黄色罫)

『相聞』第一卷第一号・創刊号 一九二九年六月 十七頁

78* 水上瀧太郎「酒後」歌稿一枚 二百字詰原稿用紙(黄緑罫)

『相聞』第一卷第五号・十月号 一九二九年十月 二十三頁

79 三宅周太郎「即興までに」草稿三枚 四百字詰「志ろきや特製」

『相聞』第一卷第四号・九月号 一九二九年九月 二十八〜二十九頁

80 武者小路実篤「偶然よんだものから」草稿二枚 四百字詰「MARUZEN」

『スバル』第二卷第九号・九月号 一九三〇年九月 十二〜十三頁

- 81 室生犀星「巖」詩稿二枚 四百字詰「魚眠洞用箋」(青色罫)
 『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 十～十一頁
- 82 室生犀星「ほそづくり・軍艦」草稿五枚 二百字詰「松屋製(SM印B∴1)」
 『スバル』第二卷第三号・三月号 一九三〇年三月 十～十一頁
- 83 望月百合子「あるコゼットの手紙」草稿四枚 四百字詰「TS」
 『スバル』第二卷第四号・四月号 一九三〇年四月 二十九～三十一頁
- 84 榎山梓月「相聞」(相聞／草庵／秋宵／四萬) 歌稿四枚 七十五字詰「時事新報社原稿用紙」
 『相聞』第一卷第五号・十月号 一九二九年十月 十頁
- 85* 柳澤健[Rainer Maria Rilke 原著]「詩とは?・ライネル・マリア・リルケの言葉」訳稿三枚「松屋製(SM印A∴1) および「十の甘松屋製(SM印A∴1)」原著作『マルテ・ラウリツ・ブリッゲの手記』(“Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge”)
 『相聞』第一卷第三号・八月号 一九二九年八月 十～十一頁
- 86 柳原燐子「白蓮日記(二)」草稿五枚 四百字詰「武蔵屋特製」タイトル「白蓮日記(二)」追加
 『スバル』第二卷第七号・七月号 一九三〇年七月 二十八～三十頁
- 87 柳原燐子「歌稿十首」歌稿二枚 四百字詰原稿用紙(青色罫) タイトル「母の歌」追加
 早稲田大学 図書館所蔵 吉井勇主宰詩歌文芸雑誌『相聞』・『スバル』の自筆原稿コレクション

- 『スバル』第二卷第一号・新年号 一九三〇年一月 三十〜三十一頁
- 88 山崎斌「西風」草稿十一枚 二百字詰「東京 文房堂製」
『スバル』第二卷第三号・三月号 一九三〇年三月 三十〜三十二頁
- 89* 横瀬夜雨「留守日記」草稿六枚 四百字詰「SY印原稿用紙」著者による朱入
『スバル』第二卷第五号・五月号 一九三〇年五月 三〜七頁
- 90* 与謝野晶子「白孔雀短歌五首」歌稿一枚 四百字詰「神楽坂 山田製」(黄色罫) 編集跡なし
九條武子「白孔雀」(太白社刊) 一九二九年十二月 序歌
- 91 吉井勇「浪華句稿」句稿一枚 四百字詰「三省堂原稿紙」(黄緑罫) 編集跡なし
『スバル』第三卷第一号・新年号 一九三一年一月 三十〜三十一頁
- 92 吉井勇「佐渡ヶ島・自歌自釋その六」(ひとつ星／御硯／カ木の宿) 草稿七枚 四百字詰「文華堂製」用箋
『相聞』第一卷第六号・十一月号 一九二九年十一月 四十八〜五十一頁
- 93 吉植庄亮「小閑集」歌稿三枚 二百字詰「橄欖」用箋 毛筆
『スバル』第二卷第八号・八月号 一九三〇年八月 二十二〜二十三頁
- 94* 吉田綾二郎「根岸あたり」草稿四枚 四百字詰「MARUZEN」タイトル傍「三輪 根岸あたり」消し(著者)

- 『相聞』第一卷第二号・七月号 一九二九年七月 四～六頁
- 95 吉屋信子「ゴンドラの正体」草稿五枚 四百字詰「東京 文房堂製」
『スバル』第二卷第四号・四月号 一九三〇年四月 二十六～二十八頁
- 96* 渡邊均「淡路島」草稿十枚 二百字詰「MARUZEN(3)」文末に日付「(四月七日)」
『スバル』第二卷第五号・五月号 一九三〇年五月 四十六～四十八頁
- 97* 伊原青々園 色紙一枚
- 98 岸本水府 色紙一枚
- 99 (1) 食満南北 色紙一枚 紙本彩色
99 (2) 食満南北 扇面一枚
- 100* 小出楯重 めくり一枚 紙本彩色
- 101 西条八十 めくり一枚 絹本墨書
- 102 (1)* 阪正臣「山家霧」色紙一枚
102 (2)* 阪正臣「社頭落葉」色紙一枚

- 102 (3) * 阪正臣 「名香をめてて」 色紙一枚
- 103 * 笹川臨風 色紙一枚 絹本墨書
- 104 佐藤春夫 色紙一枚 絹本墨書
- 105 * 野口雨情 色紙一枚 絹本墨書
- 106 * 長谷川時雨 色紙一枚 絹本墨書
- 107 花柳章太郎 色紙一枚
- 108 * 東久世通禧 色紙一枚
- 109 武者小路実篤 色紙一枚 絹本墨書
- 110 山口艸平 色紙一枚 紙本彩色
- 111 * 与謝野寛 色紙一枚 絹本墨書
- 112 よし田屋 書翰 福永宛 一通(二枚) 彩色
- 113 深水某 色紙一枚 絹本墨書

114 一洋「紀伊の大辺路」色紙一枚 絹本墨画

115 森本考順「真如歡豈窮」色紙一枚

116 「作者不明」百合図貼絵 色紙一枚

あらためて、自筆原稿の番号を掲載誌ごとにまとめると次の通りである。一つ原稿から複数号に掲載された場合は、番号にアルファベットを付した。

『相聞』

第一卷第一号(二点) 41、77

第一卷第二号(三点) 13、31、94

第二卷第三号(三点) 27、54、85

第一卷第四号(四点) 1、40、45、79

第一卷第五号(八点) 17、20、35、36、46、62、78、84

第一卷第六号(十二点) 39、48、52、53、55、56、58、60、61、71、81、92

『スバル』

第二卷第一号(十二点) 5、6、14、16、25、29、37、44、50、74、87

第二卷第二号(六点) 10、18、33、43a、47、76

早稲田大学 図書館所蔵 吉井勇主宰詩歌文芸雑誌『相聞』・『スバル』の自筆原稿コレクション

第二卷第三号（八点）	23、	24、	34、	43b、	57、	64、	82、	88	
第二卷第四号（八点）	7、	32、	42、	49、	67、	75、	83、	95	
第二卷第五号（九点）	4、	9、	19、	26、	59、	63、	69、	89、	96
第二卷第六号（三点）	2、	12、	70						
第二卷第七号（九点）	8、	11、	15、	22、	28、	30、	68、	72、	86
第二卷第八号（三点）	21、	73、	93						
第二卷第九号（三点）	3、	65、	80						
第二卷第十号（一点）	66								
第三卷第一号（三点）	38、	51、	91						
序歌（一点）	90								

『白孔雀』

本コレクションの自筆原稿は『相聞』・『スバル』の創刊号から第三卷第一号まで（ただし、第二卷第十一号を除く）の掲載作品と『白孔雀』の序歌、つまり、全て「太白社」時代のものである。太白社で編集に用いられてから後の原稿の来歴は不明であるが、掲載からおおよそ六十年後の一九九〇年（平成二）に至り、数ある掲載作品の一部とはいえ、まとまった形で早稲田大学図書館に収蔵されたのである。

原稿に残る校正・編集の跡は、主に鉛筆または赤ペンあるいはその両方で書き入れられ、そのほとんどが活字サイズやレイアウトの指定に関するものである。ほかには、掲載タイトルの追加や日付・著者住所など掲載不要な文言の

取り消しの指示が見られる。原稿中の一部の作品（短歌や短い詩）が非掲載となった例はあるがごく僅かで（原稿19、38、43）、誌面の都合によるものと思われる。つまり、詩人・歌人たちの寄稿は、ほぼそのまま、次々と雑誌に掲載されていったように見受けられる。

勇らが原稿をどのように集めたかということに関する情報は、残念ながら、本コレクションにはほとんど見当たらない。むしろ、掲載誌の「編輯後記」や随筆の中に少しばかり知ることができるだろう。

おわりに

本稿では、自筆原稿そのものについては、掲載誌との対照を行って、少しの情報を書き出したに過ぎない。今後、様々な視点から、本資料を利用してもらうことができれば幸いである。冒頭にも書いた通り、自筆原稿の多くは、早稲田大学「古典籍総合データベース」に登録されており、カラー画像をオンラインで閲覧することができる。ぜひ、これを活用して新たな発見をしていただきたい。

注

- (1) W I N E <https://waseda.primo.exlibrisgroup.com/discovery/>
- (2) 古典籍総合データベース <https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>
- (3) 『相聞』（太白社 一九二九年六月～十二月）、改題『スバル』（太白社ほか 一九三〇年一月～「一九三五年四月」正確な終刊年月は不明）。本誌刊行の詳細は本稿において後述する。
- (4) 九條武子『白孔雀』（太白社、一九二九年十二月）。一九三〇年一月十三版 早稲田大学中央図書館所蔵（請求記号 九二一・一六 八〇六）

- (5) 早稲田大学中央図書館では、『相聞』第一巻第一号〜第六号・『スバル』第二巻第一号〜第四巻第二号を所蔵（請求記号サへ 一四七五）。合本版の『相聞（一）』を含め、一部の巻号に重複がある。なお、国立国会図書館では同誌の第一巻〜第三巻の全ての巻号を「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp>)に登録しており、オンラインで各号の目次が確認できるほか、国立国会図書館または図書館送信参加館の館内では画像の閲覧が可能である。
- (6) 『スバル』五巻三号 四月号（昴社 一九三五年四月） 京都府立京都学・歴史館所蔵 吉井勇資料（資料管理番号 文学004 文書番号 3725）
- (7) 『相聞』の編集同人は、創刊号より、吉井勇、中原綾子、榛禮吉、西村酔香の四名。『スバル』への改題以降、編集は吉井勇と西村酔香の二人体制となる。（『相聞』・『スバル』各号「編輯後記」参照。）
- (8) 『吉井勇全集』全八巻（番町書房 一九六三年十月〜一九六四年五月）
- (9) 『定本 吉井勇全集』全九巻（番町書房 一九七七年十一月〜一九七九年十一月）。第九巻巻末に詳細な「吉井勇年譜」所収。本書は、前掲8の増補復刻版。
- (10) 木俣修『吉井勇研究』（番町書房 一九七八年十月）。本書は、吉井勇の五回忌に捧げようと木俣が著した『吉井勇―人と文学』（明治書院 一九六五年十一月）の改訂版である。
- (11) 前掲10、『吉井勇研究』、第一部「人と文学」の「十七『相聞』創刊」（二一五〜二六二頁）
- (12) 『日本近代文学大事典』全六巻（講談社 一九七七年十一月〜一九七八年三月）第五巻「新聞・雑誌」（二四〇頁）
- (13) 紅野敏郎『芸芸誌譚 その「雑」なる風景一九二〇〜一九三五年』（雄松堂出版 二〇〇〇年一月）『相聞』・『スバル』 吉井勇・芥川龍之介・木村莊八・郡虎彦・三上於菟吉・谷崎潤一郎ら（二二〜二三四頁）。初出は、紅野敏郎「逍遙・文学誌（五六）「相聞」（上）」「国文学」四一（二）一九九六年二月（二六二〜二六五頁）、および「逍遙・文学誌（五七）「相聞」「スバル」（下）」「国文学」四一（四）一九九六年三月（二六〇〜二六三頁）。
- (14) 籠谷真智子『九条武子…その生涯とあしあと』（同朋舎 一九八八年三月）
- (15) 『スバル』第二巻第一号（太白社 一九三〇年一月）「編輯後記」西村酔香筆
- (16) 前掲9、『定本 吉井勇全集』第九巻「吉井勇年譜」および前掲10、『吉井勇研究』を参照

- (17) 『明星』(東京新詩社 一九〇〇年四月～一九〇八年十一月) 通卷百冊
- (18) 『スバル』(昴発行所 一九〇九年一月～一九一三年十二月) 通卷六十冊
- (19) 吉井勇『酒ほがい』(昴発行所刊 一九一〇年九月)
- (20) 『文藝復興』(文藝復興社 一九一四年六月～七月) 全二冊 編集兼発行人 吉井勇
- (21) 『読売新聞』 一九一六年八月六日・八日朝刊掲載
- (22) 『人間』(玄文社、のち人間社出版部 一九一九年十一月～一九三二年六月) 全二十四冊
- (23) 『相聞』・『スバル』の寄稿者の歌人柳原燐子(白蓮)は、徳子の叔母にあたる。
- (24) 『私の履歴書』第八集(日本経済新聞社 一九五九年四月)「吉井勇」(二八五～三三五頁)。初出は、日本経済新聞連載「私の履歴書」(一九五七年)。
- (25) 石川啄木『石川啄木日記』三(世界評論社刊 一九四九年三月) 明治四十二年一月一日～四月五日(三～九二頁)
- (26) 前掲10、『吉井勇研究』(一〇七頁)「雑誌編集などのわずらわしさに勇が長くたえている筈はなかった。女性関係の事情などもあって、彼は間もなくその責任の場を去って鎌倉に逃れたのである。」
- (27) 前掲24、『私の履歴書』(三〇五～三〇六頁)
- (28) 『相聞』第一巻第一号(一九二九年六月)「編輯後記」吉井勇筆
- (29) 同右「編輯後記」西村酔香筆(五四～五五頁)
- (30) 『相聞』第一巻第三号「編輯後記」勇筆「新長崎集」を云ふものを主調として
- (31) 『スバル』第二巻第一号「編輯後記」勇筆
- (32) 吉井勇「耽々亭雑記(六) 第一次昴時代(一)」～「耽々亭雑記(十) 第一次昴時代(五)」『スバル』第二巻第六号～第十号 一九三〇年六月～十月。
- (33) 『スバル』第二巻第六号「編輯後記」勇筆
- (34) 『スバル』第二巻第二号「編輯後記」勇筆
- (35) 『スバル』第三巻第七号「編輯後記」勇筆

- (36) 『スバル』第四卷第一号「編輯後記」勇筆
- (37) 昭和八年十一月、不良ダンス教師の検挙に伴い妻徳子の不行状が取り沙汰され、勇は妻と別居（のちに離婚）、従四位伯爵の爵位を息子に譲って隠居せざるを得なくなり、文壇からも遠のくこととなった。村松梢風『現代作家伝』（新潮社 一九五三年五月）「吉井勇」（二三六～二三九頁）
- (38) 『スバル』第五卷第三号「編輯後記」勇筆
- (39) 前掲10、『吉井勇研究』（二五五～一五六頁）
- (40) 前掲10、『吉井勇研究』（二六二頁）
- (41) 吉井勇『短歌入門』（誠文堂 一九三二年）(Seibundo's 10 sen Library 52)
- (42) 前掲9、『定本 吉井勇全集』第九卷収載「短歌入門」（七七頁）

（まつお あこ 高田早苗記念研究図書館担当課）